

【論文】

『梅光言語文化研究』第4号（2013年）pp. 1・19
@2013年 梅光学院大学国際言語文化学会

推論結果を表す談話標識 *so* と *then* :

先行発話に対する話し手の態度の違い

松尾文子

要旨 The inferential discourse markers *so* and *then* indicate that the speaker infers or concludes something based on the evidence given in the previous utterance. In some cases, the two words are used in almost the same way, but in other cases, they have fine shades of difference in the usage. The difference is caused by the speaker's attitude toward what the other has said. Basically, *so* shows a kind of agreement, acknowledgement of what the other has said. In contrast, the speaker does not entirely agree with the other's opinions with *then*. I will explain the usage of *so* and *then* by way of example.

キーワード： 談話標識 推論 話し手の態度 *so* と *then*

1. はじめに

本論では対話における応答で用いられる推論結果を表す談話標識 *so* と *then* を取り上げる。この2語の用法には2章で示すように、同じ部分と異なる部分とがある。用法が異なる場合、どこがどのように異なるのか。その相違は微妙な場合が多いが、実例を分析してみると、先行発話（内容）を話し手がどう捉えているかという先行発話に対する話し手の態度が用法の相違の原因だと分かる。すなわち、*so*、あるいは *then* を含む当該の発話で表される結果を導き出す根拠となる事柄や事態を、話し手がどのような態度で受け入れているのか、あるいは受け入れているのかという点に違いが見出せるということである。

第2章では従来の見解を紹介し、3章では先行発話に対する話し手の態度、4章では疑問文で用いられる場合、5章では発話の意図を確認する疑問文で用いられる *so* と *then*、6章では文尾で用いられる *then* 及び *so* との共起、7章では先行発話が非言語情報である場合、8章では *then* が用いられる場合の表現上の特徴を述べる。

2. 従来の見解

so と then に関する従来の見解をいくつか紹介する。

- ① Quirk et al. (1985²) : so は resultive conjunct、then は inferential conjunct
- ② Halliday & Hassan (1976) : 両語とも causal な関係を表す。causal を result / reason / purpose と conditional に2分割し、so は result, then は conditional を表す。
- ③ Leech et al. (2006²) : so は result、then は conclusion
- ④ Biber et al. (1999) : 両語とも result / inference
- ⑤ Swan (2005³) : so、then とも logical consequence を表し、‘since that is so’ ‘it follows from what you have said’ とパラフレイズできる (p.529)。
- ⑥ Carter & McCarthy (2006) : 両語とも ‘since that is the case’ ‘because that is so’ とパラフレイズできる (p.146)。

これらを見る限り、両語にどのような違いがあるのかははっきりしない。

両語の違いについては、以下のことが述べられている。

- (1) a. It's more expensive to travel on Friday, *so* I'll leave on Thursday evening.
(Swan 2005³: 538)
- b. It's more expensive to travel on Friday. **Then* I'll leave on Thursday evening.
(=It follows from what *I* have said.) (ibid.)
- c. "It's more expensive to travel on Friday." "*So / Then* I'll leave on Thursday evening." (=It follows from what *you* have said.) (ibid.)
- d. A: It costs much less to run a diesel car.
B: *Then / So* I guess we should get a diesel. (Carter & McCarthy 2006: 146)
- e. It's going to cost us too much to fly, *so / *then* we're going by train. (ibid.)

(1b、e) から分かるように、話し手は then で自らの発話 (情報) を根拠に推論することはできない (Swan 2005³: 538)。つまり、第2の陳述が先行の陳述から導き出される場合、同一話者の2つの陳述をつなげられないのである (Carter & McCarthy 2006: 146)。一方、(1c、d) のように、当該の発話と先行の発話の話し手が異なる場合には、so でも then でも可能である。

Halliday & Hasan (1976: 257) では、因果関係を表す so は内的意味（コミュニケーションの過程 [話し手と聞き手の相互作用という形式] に内在する関係）を then と共有しているとする。すなわち、「あなたの言うこと（または他の証拠）から判断して次の結論に達する」(I conclude from what you say (or other evidence)) という話し手の推論過程について述べるのである。

さらに、then が条件関係「こういう条件のもとでは」(under these circumstances) の意を表す場合、2つのタイプがあるとする (p.259)。1つは因果関係と条件とが重複したタイプで、‘if, as is the case~, then~’ ‘if / since~, (then) …’ の意を表し、この場合は so も then も用いられる。もう1つは仮説を表すタイプで、この場合は so は用いられない。

3. 先行発話に対する話し手の態度

so は先行発話で表される内容から導き出される結果を導入する。次例は、Luther と友人の Stanley の会話で、クリスマスの晩餐会について話している。

- (2) “I hear you’re not going to be at the Christmas dinner tomorrow night,” he said, … “I’m eliminating a lot of things this year, Stanley, no offense to any one,” Luther said. “So it’s true.” “It’s true. We will not be there.” —Grisham, *Christmas* (「君は明日のクリスマス晩餐会に行かないそうじゃないか」スタンリーは言った …「今年は、色々と省略することにしたんですよ、スタンリー。誰かに腹を立ててるわけではありません」ルーサーは答えた。「ということは、本当なんだ」「ええ、そうです。私たち(夫婦)は出席しません」)

Luther が晩餐会に出席しないと聞いたという Stanley の発話に対して、Luther は「色々なことを省略する」と答えた。Stanley はそこから晩餐会に出席しないという結論を導き出し、聞いた情報は本当だったと言っている。Stanley の想定が Luther の発話で証拠づけられているのである。

次例は、クリスマスの行事をせずに旅行に出る計画についての夫婦の会話である。

- (3) “… We skip Christmas, save the money, and go splash in the Caribbean for ten days.” “How much will it cost?” “Three thousand bucks.” “So we save money?” “Absolutely.” —Grisham, *Christmas* (「… クリスマスをすっぽかして金

を節約して、10日間カリブ海での水遊びに出かけよう」「(旅行に) いくらかかるの?」「3,000ドルだ」「じゃあ、節約できるってことね?」「もちろんさ)」

妻は旅行費用が3,000ドルだという情報を受けて、すでに持っている知識(去年はクリスマスに6,000ドル使った)と照らし合わせて導き出した結論を確認している。同時に、夫の先行発話‘save the money’の念押し・確認にもなっている。

ここまでで言えることは、soの場合、先行発話で提示される情報を話し手が受け入れ、それを根拠にso以下で推論結果を述べているということである。たとえば、(2)ではクリスマスの行事を省略するという、(3)では旅行費用が3,000ドルだという情報を確固たる証拠として受け入れている。したがって2例とも、soを含む発話に対する相手の応答が、soに導かれる推論結果を肯定するものになっている。

先行発話で示される情報を話し手が認めているということから、soが推論というより言い換えに近い機能を持つことがある。次例はロースクールの学生と刑事の会話である。

- (4) “But I checked this guy out online. He really works for the FBI.” “Yes, these are real names. We just borrowed them for the night.” “So, you’re impersonating an officer?” “Certainly, but it’s just a small offense. Not worth your trouble.” —Grisham, *Associate* (「でも、この男のことはネットで確認したんだ。本当にFBIの職員だったぞ」「そう、これも他の名前も実在の職員の名前だ。今夜一晩名前を拝借しただけだ」「つまり、捜査官の身分を詐称したってことか?」「その通り。しかし、そんなことはちょっとした違反に過ぎない。君のトラブルほどのものではない)」

刑事の「他人の名前を借りた」という発話を学生は「身分詐称だ」と言い換えている。「AとはつまりBである」と言い換えるには、話し手はAの情報を受け入れていなければならない。

thenも先行発話で表される内容から導き出される結果を導入する。次の2例は、soに置き換えても意味はほとんど変わらないと思われる。(5)は検死官と友人の殺人課刑事の会話である。(6)は検死官が8年前の殺人事件のことをある刑事に訊いている場面である。

- (5) “The Lincoln you was (原文のまま) interested in?” “Yes?” “A1990 Mark Seven. Registered to a Barry Aranoff, thirty-eight-year-old white male from Roanoke. Works for a medical supply company, a salesman. On the road a lot.” “*Then* you talked to him.” “Talked to his wife. He’s out of town and has been for the past two weeks.”—Cornwell, *Remains* (「あんたが興味を持ってたあのリンカーンだが」「ええ」「1990年型マークセブンだ。バリー・アラノフ、ロアノークに住む38歳の白人男性名義だ。医療機器販売会社に勤めるセールスマンで、しょっちゅう出張してる」「じゃあ、その人と話をしたのね」「奥さんと話した。本人は今、出張中で、ここ2週間いないそうだ」)
- (6) “I notice from the autopsy photographs that both women had ligature marks around their wrists,” I said. “Did you recover whatever might have been used to bind them?” “No, ma’am.” “*Then* apparently he removed the ligatures after killing them?”—Cornwell, *Remains* (「検死の写真では、2人とも手首に紐の跡があるわね」と私は言った。「2人を縛るのに使われた可能性のあるものなら何でもいいんだけど、見つかったの?」「いいや」「じゃあ恐らく、犯人は2人を殺してから、紐をはずしたのね」)

(5)では刑事が先行発話でリンカーンの持ち主の情報を述べたことから、検死官は「刑事が持ち主と話した」という結論を導き出し、(6)では「手首を縛った紐がみつからない」という刑事の先行発話から、検死官は「殺害後に紐を外した」という結論を導き出している。

それでは so と then の違いはどこにあるのだろうか。次例は、検死官と友人の FBI の容疑者性格分析官の会話である。検死官は問題の捜査に関っているはずなのに、友人の態度に割り切れない思いでいる。

- (7) “... I’m no longer sure I even have a role in the investigation. Or at least you seem determined to make sure I don’t have one.” “I’m not doing anything of the sort.” “*Then* someone is.” He did not reply.—Cornwell, *Remains* (「... この事件で自分が何らかの役割を果たしているのかどうかさえ、もはや自信がなくなつたわ。と言うか、少なくともあなたは、私が捜査で役割を果たさないにしようと思ってるみたいだわ」「そんなことはしてないよ」「じゃあ、誰かがそうしている」彼は答えなかった。)

検死官の「あなたが私を捜査に参加させないようにしている」という見解に対して相手は否定の意を示し、それに対して検死官は then 以下で「それならばあなた以外の誰かがそうしている」と結論を導き出している。

次例は、検死官と US エアの航空券販売係の会話である。Harper という女性がある飛行機便に乗ったかどうかを空港に電話して確認している。

- (8) “Yes, I know there’s a twenty percent penalty,” I said to the USAir ticket agent. “You misunderstand. I’m not trying to change the ticket. This was weeks ago. I’m trying to find out if she ever got on the flight at all.” “The ticket wasn’t for you?” “No,” I said for the third time, “It was issued in her name.” “Then she really needs to contact us herself.” “Sterling Harper is dead,” I said. “She can’t contact you herself.”—Cornwell, *Body* (「ええ、20 パーセントの違約金を払わなければならないことは知っています」と、私は US エアの航空券販売係に言った。「あなた、勘違いしてるわ。航空券を取り換えたいわけではないの。これは何週間も前のことだね。この女性はその便に乗っていたかどうかを知りたいんです」「チケットはご自分のものではなかったんですか?」「ええ、違います」こう言うのは3回目だ。「その女性の名前で発行されたんです」「それなら、その方ご自身が連絡くださらないと」「スターリング・ハーパーは亡くなったの」と私は応じた。だから、自分で連絡できないんです)

検死官の「チケットは自分名義ではない」という発話を受けて、販売係は「チケットの名義人自身が連絡する必要がある」と結論付けている。

then のこの2例に共通する特徴は何であろうか。(7)では話し手である検死官の相手に対する反駁と挑戦的態度が、(8)では話し手である販売係の相手に対する不快感が示されている。つまり、話し手は相手が提供する情報を確固たる事実として納得しているわけではなく、相手に対して否定的で反抗的・挑戦的な態度を示しているのである。したがって、(1b, e) のように同一話者の2つの発話をつなぐことができない。then を用いると、自らの発話に疑義を抱いているにもかかわらず、結論を導き出すことになるからである。then が用いられる場合の表現の特徴については、8章を参照されたい。

4. 疑問文で用いられる場合

次に、疑問文で so と then が用いられる例を見る。相手の発話意図の確認（通例、平叙文の語順のままに疑問符を付す形）以外では、両語の相違はほとんど見られないように思える。もともと、相手の発話内容に対して疑問を持って質問するからである。

次例は、アメリカ海軍兵学校の教官夫妻の会話で、妻は夫が CIA で仕事をすると聞いたのに反発している。

- (9) “These bastards kill people they don’t even know. They almost do it for fun. They want to change the world into something they like, and they don’t give a damn—who’s in the way. *They just don’t care.*” “So why go to the CIA? Can they protect you us—I mean…” “I want a better feel for what these guys are all about.”—Clancy, *Patriot* (「あいつら (テロ組織のアルスター解放軍) は知らない人さえ殺す。楽しみのためにそうしているようなものだ。世界を自分達の好きな形に変えたがっていて、誰が邪魔をしよう構わない。気にもかけないんだ」「それなら何故 CIA へ行くの？ あなたを、私たちを守ってくれるとでも…」「奴らがどんな連中なのか、もっとよく知りたいんだ」)

CIA でテロ組織と関る仕事をするようになる夫が、テロ組織の恐ろしさを語った。それを受けて妻はそれでも夫が CIA に行く理由を尋ねている。疑問文の中でも、特に why で始まる疑問文は元来、反駁や挑戦的な態度が含意されている。

次例は、新人弁護士 Mitch と私立探偵の秘書の会話である。私立探偵は何者かに殺された。

- (10) “Who else would follow him?” Mitch asked. “No one. He was a good investigator who left no trail. I mean, he was an ex-cop and an ex-don. He was very street-smart. He got paid to follow people and collect dirt. No one followed him. Never.” “So who killed him?” “Whoever was following him…”—Grisham, *Firm* (「他に彼を尾行するような人間は？」ミッチは尋ねた。「誰もいないわ。彼は優秀な探偵で、手がかりを残すようなことはなかったのよ。つまり、元警官で、元マフィアのドンでもあったってことよ。都会の裏の生活に通じてたの。誰かを尾行してクズみたいな情報を集めてお金をもらってたんだもの。尾行されたことなんてなかったわ。1度だってね」「じゃあ、誰に殺されたんだ？」「彼を尾行してたやつなら誰

だって。…」)

私立探偵が誰かに尾行されたはずはないという秘書の発話を受けて、Mitch はそれならば誰が殺したと言うのかと尋ねている。

次に then の例を見る。(11)は夫婦の会話で、いつもはクリスマスに家族で海外に出かけているが、今年は諸般の事情で行けそうにない。(12)は検死官と友人である新聞記者の会話で、森の中で2つの死体が発見された事件について話している。

(11) “Beth,” he says, “I’m sorry, honey. I’m sorry” She looks up. “What’s the matter?” she whispers. “Is something the matter?” “No! Nothing’s the matter.” “Then why can’t we go?” She leans toward him. “You know how good it feels to get away. …”—Guest, *People* (「ベス、ごめんよ。すまない」と彼は言った。彼女は顔をあげた。「何がいけないの?」と呟くように尋ねた。「何か都合の悪いことがあるの?」「いや! 何もないさ」「じゃあ、何故行けないの?」彼女は夫の方へ身を乗り出した。「どこかへ出かけるってどんなに素敵なことか知ってるでしょう。…」)

(12) “… And I don’t think the FBI is sitting on this thing just because they want to make sure nothing screws up the investigation.” “Then why?” I asked uneasily. “Because we’re not just talking about serial murders. …”—Cornwell, *Remains* (「… FBI が捜査を台無しにしたくないというだけで、このことを伏せているとは思わないわ」「それじゃ、何故なの?」不安な気持ちで尋ねた。「これは単なる連続殺人事件じゃないからよ。…」)

(11)では、出かけるのに都合が悪いことはないという夫の発話を受けて、妻はその理由を問い詰める。(12)では、FBI が事件のことを伏せている理由に関する記者の見解を受けて、検死官はその理由を尋ねる。then を用いた疑問文では、(12)のように疑問詞以外は省略した形の疑問文がしばしば用いられる。

また、この形式では then が文尾で用いられることが多い。(13)は息子の Con と父親の会話である。she は母親を指す。(14)は Cal と友人の会話で、Beth は Cal の妻、Con は息子である。

(13) “It won’t change anything. It won’t change the way she feels about me.”

“The way she—Con, she was upset tonight. She was angry—” “No, I don’t mean tonight.” “What, *then*?” But he shakes his head. “No. I can’t. Everything’s jello and pudding with you, Dad. I can’t—you don’t see things—” —Guest, *People* (「そんなことをしたって何にも変わらないよ。彼女(母さん)の僕に対する見方は変わりっこないんだ」「見方ねえ—コン、母さんは今夜は気が動転していた。腹も立ててた—」「いや、今夜のことじゃない」「じゃあ、何だ?」しかし彼は首を振った。「駄目だ。僕には話せないよ。何事にしても甘いんだよ、パパは。話せないよ—パパは事情が分かってないんだもの—」)

- (14) “… But they leave, Cal. And all that worrying doesn’t amount to a hill of crap. Just wasted energy.” “I’m not worried about Con,” he says. “Who, *then*? Is it Beth? Is something wrong between Beth and you?” “No!” “You sure?” “Yeah, I’m sure.”—Guest, *People* (「…だが、子ども達は離れて行くものだ、キャル。だから、くよくよしたところで何ともならないよ。エネルギーを消耗するだけだ」「おれはコンのことでくよくよしたりはせんよ」キャルは言った。「じゃ、誰のことで? ベスか? ベスとの間にまずいことでもあるのか?」「ないって!」「本当か?」「もちろんさ!」)

(13)では、息子の発話「話しているのは今夜のことでない」を受けて、父親は「何のことなのか」と問い返し、(14)では、「くよくよしているのは息子のことではない」という Cal の発話を受けて、友人は「誰のことでくよくよしているのか」と尋ねている。(13)の “What, then?” は、「今夜のことでなければ、何なのか」の意であり、“So what?” で表される「じゃあ、何を言いたいのか」と相手の発言意図を尋ねる疑問文とは異なる。

ここで、“So what?” と “Then what?” を比較する。“So what?” は相手が何を言いたいのか、すなわちどんな結論を導き出してほしいのかの発話意図を問う表現である。しばしば話し手は *what* の内容が分かっており、それをわざわざ尋ねるので皮肉な含意が生じる。次例は、英国皇太子を射殺しようとした罪で告発されたテロリストを弁護する弁護士と、被告に不利な証言をする証人のやり取りである。

- (15) “… You did not see him (=the terrorist) fire a single shot, did you?” “No, sir, but his automatic had an eight-shot clip, and there were only three rounds in it. When I fired my third shot, it was empty.” “*So what?* For all you know

someone else could have fired that gun. You did not see him fire, did you?”—Clancy, *Patriot* (「… あなたは彼が一発でも撃つところは見なかったんでしょう?」
「はい、見ていません。しかし、彼の自動拳銃の挿弾子には8発入りますが、3発しか残っていませんでした。私が3発目を撃つと、空になりました」「だからどうだと言うのですか? 他の誰かがその銃を撃った可能性があることしかあなたには分からない。あなたは、彼が撃つところを見なかったのでしょうか?」)

現場に居合わせた証人は被告が落とした銃を奪って撃った。銃の挿弾子には弾丸が8発入るはずなのに、証人が3発目を打つと空になったのだから、それ以前の弾は被告が撃ったはずだと言いたい。それに対し、「だからどうだと言うのか」とどのような結論を述べたいのかと相手の発話意図を問い返す。

一方、“Then what?”は先行文脈で述べられた事態が起こるとするとどうなるのかの情報を求める。次例は、MSUC（メープルシロップ尿症）の患者であろう犯人に関する会話である。

(16) “MSUD tends to flare up under physical stress, … Emotional stress and physical stress are connected—one adds to the other. The more emotionally stressed he becomes, the more physically stressed he becomes, and vice versa.”

“Then what?”—Cornwell, Postmortem (「MSUCは身体的ストレスに晒されると悪化する傾向がある。… 精神的ストレスと身体的ストレスは関連があって、互いに悪影響を与える。精神的なストレスが大きくなればなるほど、身体的なストレスも大きくなるし、その逆も言える」「そうすると、どうなるんだい?」)

ここでは、ストレスが強くなってMSUDが悪化すると次にどうなるのか情報を求めている。

なお、疑問文の文尾でthenを用いることが可能である。native speakerによると、文頭のthenは少しばかりぶしつけで唐突、相手に対してより否定的で非難の気持ちを表し、あまり友好的ではないニュアンスが感じられるのに対して、文尾では否定的なニュアンスを和らげたり弱めたり (de-emphasize) する機能を持つとする。¹

5. 発話の意図を確認する疑問文

soで相手の発話の意図するところを推論して述べるができるが、平叙文の語順

で疑問符を付す形で、相手に発話の意図を確認することがしばしばある。次例は、新人弁護士と FBI の捜査官の Tarrance の会話である。弁護士は自分の勤務する法律事務所から重要な資料を盗み出そうとしている。

- (17) “Tell him a million bucks won’t do it, Tarrance. You boys like to brag about spending billions fighting organized crime, so I say throw a little my way. What’s a couple of million cash to the federal government?” “*So* it’s a couple of million now?” “Damned right it’s a couple of million. …”—Grisham, *Firm* (「彼 (FBI長官) に 100 万ドルじゃできないと伝えてくれ、タランス。あんたたちは組織犯罪との戦いで数十億ドル費やしたと自慢したがるんだから、少くらい分けてくれてもいいんじゃないか。連邦政府にとって 200 万ドルがどれだけのものなんだ?」「それじゃ、200 万ドルにするんだな」「その通り、ちょうど 200 万ドル。…」)

相手の 200 万ドルは連邦政府にとって端下金だという発話を受けて、捜査官は「(資料を盗み出すための謝礼として) 200 万ドルを望んでいる」という発話意図を推論し、それを確認している。

then も同様に用いられる。次例は裁判の場面で、Thompson は原告側の証人で町医者である。

- (18) JUDGE : Answer the question, Mr. Witness, please. Would a nine-minute lapse in restoring the heartbeat in and of itself be negligence?

THOMPSON : In that small context, I would have to say no.

JUDGE : *Then* you’re saying there’s no negligence, based on my question?—

Verdict [映画台本] (「では、証人の方、質問に答えて下さい。心臓の機能回復に 9 分間かかったのは、それ自体過失だと考えられますか?」「そのような狭い意味では、過失とは言えないと思います」「では、私の質問の範囲においては、過失はなかったとおっしゃるのですね)」

裁判長は町医者の発話を受けて、再度発話意図を確認している。

また、so が単独で用いられることもある。次例は、脚を怪我した男性と友人の女性の会話である。

- (19) “I’m on these crutches.” “*So?* It’s good exercise for your leg,” she said.—
Tyler, *Tourist* (「松葉杖をついてるんだよ」「それで? 脚にはいい運動じゃないの」
と彼女は言った。)

相手の発話を受けて、「それで何が言いたいのか」と発言意図を問うている。なおこの用法では、*So what?* の形も用いられる。これについては、4章を参照されたい。

so では、話し手は先行発話で提示される情報を認めた上でその情報を根拠に結論を導き出すと述べた。このことが関係する現象が *matching tag* で見られる。*matching tag* は主節と付加節の極性が一致する付加疑問文である。*matching tag* の前にしばしば *so* が現れる。*matching tag* の主節では、相手の言葉が繰り返されたり、相手の発話意図や先行発話から推論した結果が述べられる。

- (20) *So you call that hard work, do you?*² (Leech & Svartvik 2002³: 133)

ここでは、話し手はその場の状況から導き出した結論を述べており、確認の機能を持つ付加疑問文 (*just-checking question*) である。すなわち、話し手は発話状況を推論の根拠として認めた上で、結論を導き出しているのである。³ なお、先行発話が非言語情報 (発話状況) である場合に関しては、7章を参照されたい。*matching tag* はこの例文のように、アイロニーの他に不信、反駁、非難、怒り、驚き、興味など様々な話し手の感情を表す。⁴

次例は、Trask 家のメイドの Mary がかかってきた電話に出た場面である。女性の声は実は Trask 氏の別居中の妻である。*so* が *matching tag* に先行している。

- (21) WOMAN’S VOICE : Mr. Trask’s residence? (Laughter; then, hoity-toity) To whom am I speaking?

MARY : This is Mr. Trask’s maid.

WOMAN’S VOICE : *So* Mr. Trask has a maid, *has he?* Well, that’s more than Mrs. Trask has.—Capote, *Work* (「トラスクさんのお住まい? (笑い声、それから少し気取って) あなた、どなたかしら?」「トラスクさんのメイドです」「じゃあ、トラスクさんにはメイドがいるってことなの? トラスク夫人にはいないのにね」)

女性は Mary の発言を聞いてそれを確固たる根拠として、「Trask 氏にはメイドがいる」という結論を導き出し、それを確認している。ここでは皮肉なニュアンスを伴う。

6. 文尾で用いられる *then*、及び *so* との共起

then は時に文尾で用いられる。Schiffrin (1992: 781) は、先行発話を X、後続発話を Y とすると、Y が先行の情報によって確実な証拠を与えられ、かつ省略的に提示される場合には *then* は文尾にしか生じないとする。また、内田 (2000) は文尾に生じる談話標識に関して、Sperber & Wilson の提唱する Relevance Theory (関連性理論) の枠組みで、話し手が自らの発話行為にコメントしているとする。*then* の場合は、*I'm to conclude* の意を表すことになる。⁵

例を見よう。Sarah は検事補で妹を誘拐された。Sarah と誘拐犯の会話で、誘拐犯が Sarah の家を訪れようとしている。

(22) “What would be a good time?” “Tomorrow or the next day between nine and twelve, or late afternoon,” Sarah told him. “Tomorrow morning, *then*.”—Clark, *Town* (「いつがよろしいですか?」「明日か明後日の 9 時から 12 時の間か、午後遅くなら」とサラは彼に言った。「では明日の朝ってことで」)

ここでは、先行発話で具体的な時間が提示されて、それを受けて誘拐犯の返答が省略的に提示され、「明日の朝 (に訪問する) と結論づける」と答えている。

次例は、妻の Sarah に出て行かれた夫 Macon と妹の Rose の電話での会話である。

(23) “At any rate,” she said. “Has Sarah been in touch since she left?” “She’s come by once or twice. Once, actually,” Macon said. “For things she needed.” “What kind of things?” “Well, a double boiler. Things like that.” “It’s an excuse, *then*,” Rose said promptly. “She could get a double boiler at any dime store.”—Tyler, *Tourist* (「いずれにせよ」と彼女は言った。「出て行った後、サラから連絡はあったの?」「1 度か 2 度家に来たよ。いや、1 度かな」とメイコンは言った。「必要なものを取りにね」「どんなものを?」「まあ、二重釜とか、そんなものだ」「それは口実だわね」とローズは即座に言った。「二重釜なんてどこの雑貨屋でも買えるわ」)

Rose は Macon の発話を受けて、「それは口実だと結論づける」と答えている。ここでは日本語の語感として、then を「じゃあ、それじゃあ」と解釈するのはおかしい。

ところで、so と then は “So…, then” の型で共起することがある。次例は、アメリカ海軍兵学校教官とイギリス人新聞記者の会話である。

- (24) “And what of your perspective, as an Irish-American, on the Troubles?” the *Telegraph* wanted to know. “We have enough problems of our own in America without having to borrow yours.” “So you say we should solve it, then?” “What do you think? Isn’t that what problems are for?”—Clancy, *Patriot* (「では、アイルランド系アメリカ人として、(北アイルランド) 紛争に関するあなたの見通しはどうですか？」とデイリー・テレグラフの記者が知りたがった。「あなたの方の問題を借りなくても、アメリカには我々自身の問題が十二分にあります」「では、我々が解決すべきだと言うんですか?」「あなたはどのように考えますか? 問題というのはそういうものではないですか?」)

相手のアメリカには自分達の問題が十二分にあるという発話を受けて、新聞記者は「我々イギリス人が自分自身で問題を解決すべきだとあなたは言っている」という結論を導き出し、確認している。先述したように、so は先行発話で提示された情報を認めた上で結論を導き出すが、then を文尾に加えることで、then を文頭で用いる場合よりも相手に対する反駁的・挑戦的ニュアンスを軽減し、同時に so のみの場合よりも相手の見解に対する同意の度合いを下げている。

次例は、医師と少年の会話である。

- (25) “You speak German?” “Yes.” “Ah, so you’re not Russian, then?” “No.”—Archer, *Kane* (「ドイツ語は話せるのかね?」「はい」「ああ、すると君はロシア人じゃないんだな?」「違います」)

医師はロシア人はドイツ語が話せないという想定を抱いているので、このように答えている。この例も(23)と同じことが当てはまる。さらに native speaker によると、ここで so がないと唐突で疑念を抱いていて、場合によっては非難のニュアンスが生じるとする。

then を文尾で用いると相手に対する反駁的・挑戦的ニュアンスを軽減することに関

しては、次例からも分かる。次例は、私立探偵と、夫が浮気しているという匿名の手紙が届いた女性の会話で、手紙の送り主が分かって手紙を送った理由について話している。

- (26) “I suspect one of the reasons must be that Mrs. Flowers is at present suing your husband.” “Well, that explains the whole mystery.” said Anne. “She must want revenge. How much does she claim Henry owes her?” “She is not suggesting debt, Mrs. Osborne.” “Well, what is she suggesting *then*?”—Archer, *Kane* (「理由の1つは、フラワーズ夫人が目下のところあなたのご主人を訴えていることに違いないと思います」「そうね、それなら話がすっかり通じるわね」とアンは言った。「彼女は復讐したいに違いないわ。ヘンリーにいくら貸しがあると言ってるのかしら?」「貸しがあるとかの問題じゃありませんよ、オズボーン夫人」「あら、それじゃ何だと言ってるのですか?」)

ここでは、ためらいや熟考を表す *well* が共起していて、*then* を文頭で用いるよりも反駁的なニュアンスが弱まっている。

7. 先行発話が非言語情報

so も *then* も通例、先行発話を受けて推論結果を述べるが、*so* は先行発話がなくとも発話状況などから結果を導き出して述べることができる (Blakemore 1988: 189; 1992: 139)。 *then* はこの用法では用いられない。3章で述べたように、*so* では先行発話で与えられる情報を話し手が受け入れ、それをもとに *so* 以下で推論結果を述べているが、*then* では話し手は相手が提供する情報を確固たる事実として認めているわけではなく、相手に対して否定的で反駁的・挑戦的な態度を示す。先行発話が非言語情報である場合は、実際の発話状況で生じている事態を話し手が受け入れて、そこから導き出される結論を述べるのであるから *so* が用いられる。(27)は警官が Charlie に盗難事件に関する事情を訊きに行った場面、(28)は Peter が有名なキャスターである Dana に初めて出会った場面である。

- (27) The policeman looked at Charlie and Charlie smiled back. “*So* you know about the robbery?” queried the man. “I didn’t get your name?” replied Charlie.—Freemantle, *Clap* (警官がチャーリーに目をやるとチャーリーは微笑み

返した。「では、盗難のことはご存知ですね？」と、その男は質問した。「まだお名前を伺っていませんでしたね？」と、チャーリーは応じた。）

- (28) Peter Tomkins said, “*So this is the famous Dana Evans, eh?*”—Sheldon, *Sky*
(ピーター・トムキンスは言った。「ああ、あなたがあの有名なダナ・エヴァンスなんだよな？」)

(27)では、突然の訪問にも関わらず、Charlieが警官に微笑み返した状況から、「相手は盗難のことを知っている」という推論結果を導き出し、それを確認している。(28)はDanaの姿が日頃テレビで見ている顔と話し手の頭の中で一致して、「あなたがDanaだ」と結論を導き出し、それを確認している。このsoは今しがた分かったことや直近の発見を述べて、間投詞的に用いられている。また、確認を求めるehと共起している。

8. then が用いられる場合の表現上の特徴

then が用いられる場合、先行発話と then に導かれる発話に表現上の特徴が見られる。第一に、先行発話に否定的要素が用いられることが多い。第二に、then に導かれる発話に話し手の判断を示す法表現が用いられることが多い。片方の特徴のみが見られることも、両方の特徴が見られることもある。

先行発話に否定的要素が見られることは、3章で述べた then が用いられる場合、話し手は相手が提供する情報を確固たる事実として認めているわけではなく、相手に対して否定的で反駁的・挑戦的な態度を示すということと関係がある。話し手が何らかの主張をし、それを相手が否定する。さらにそれを受けて話し手が導き出した推論結果を then 以下で提示する。この時、話し手は最初の自分の主張が否定されたので、相手の主張、つまり自分の主張を否定されたものを完全に受け入れているわけではない。そこで話し手の相手の主張に対する否定的な態度や、反駁的・挑戦的な態度が示されることになる。さらに、相手の主張、つまり先行発話を確固たる事実として認めているわけではないので、then 以下で示される結論に話し手の判断を示す法表現が用いられることがある。

先行発話に否定的要素が用いられる例は、(6)(7)(11)(12)(13)(14)を、後続発話に法表現が用いられる例は、(6)を参照されたい。

9. おわりに

談話標識の so と then は、談話の冒頭で推論結果を表すために用いられる。両語の

用法には相違があり、時にそれは微妙な場合もある。相違の原因は、先行発話に対する話し手の態度・捉え方である。

so では、話し手は先行発話で示される情報を認めて確固たる根拠として捉え、肯定的な態度を取る場合が多い。それに対して、then は元来 ‘if … then ~’ の条件節に対する帰結節で用いられることから、先行発話で示される情報を完全に認めているわけではなく、話し手の否定的・反駁的・挑戦的態度が表される。これらのことが言語表現の特徴に反映される。so は同一話者の発話をつなぐことが可能であるが then では不可能であること (1)、so が matching tag を従えることができること (20、21)、先行発話が非言語情報 (発話状況など) である場合、so のみが用いられること (27、28)、否定的表現や法表現の用いられ方 (8 章) などに見られる。

then は文頭でも文尾でも用いられる。文頭では唐突で無礼、相手に対する非難の気持ちに伴う傾向があるのに対し、文尾ではそれらのマイナスのニュアンスが和らげられる傾向がある。

さらに、両語は “So …, then” の型で共起するが、多くの場合 so がなければ唐突な感じがする。so のみを用いると、話し手は先行発話を十分に認めていることになるが、then を文尾に付加することで容認の度合いが少し下がる一方で、文頭で用いるよりは否定的なニュアンスを軽減する (24、25)。

注

- 1 同僚の Linda Spetter 教授の示唆による。実り多いディスカッションに対して、この場を借りて感謝申し上げる。
- 2 文強勢は以下の通りとなる。So you call that hard wòrk, dó you?
- 3 Cattell (1973: 615) には matching tag に関して以下のような記述がある。

John: I have translated that Russian sentence for you. It means, ‘Necessity is the mother of invention.’

Harry: a. It means, ‘Necessity is the mother of invention,’ *does it?*

b. It means, ‘Necessity is the mother of invention,’ *doesn’t it?*

ここでは John の質問に対して Harry は a で答えるのが普通で、b で答えると John は当惑するだろう。Harry が John から今しがた聞いたばかりの訳を、まるで自分の訳であるかのように主張するからである。

- 4 matching tag で様々な話し手の感情が表される理由は、松尾 (1995) を参照されたい。

- 5 内田 (2000: 27) では、この then は手続き的情報で高次表意にかかわる制約を表すとする。

参考文献

- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 1988. “‘so’ as a Constraint on Relevance.” In R. M. Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*. Cambridge: Cambridge University Press. 183-195.
- . 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- Carter, R. & M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cattell, R. 1973. “Negative transportation and tag questions.” *Language* 49, 612-639.
- Halliday, M. A. K. & R. Hassan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Leech, G. N., B. Cruickshank & R. Ivanič. 2006². *An A-Z of English Grammar & Usage*. Harlow: Pearson Education.
- Leech, G.N. & J. Svartvik. 2002³. *A Communicative Grammar of English*. London: Addison-Wesley.
- 松尾文子. 1995. 「2種類の付加疑問文—Matching tagを中心に」『英語語法文法研究』第2号. 英語語法文法学会. 155-166.
- . 1998. 「推論的応答で用いられる then の用法」『現代英語の語法と文法』小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会. 東京: 大修館. 296-304.
- Quirk R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985². *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Schiffrin, D. 1992. “Anaphoric *then*: aspectual, textual, and epistemic meaning.” *Lingua* 30, 753-792.
- Swan, M. 2005³. *Practical English Usage*. London: Cambridge University Press.
- 内田聖二. 2000. 「いわゆる談話標識をめぐって—Constraints on Implicatures or Explicatures?」『英語語法文法研究』第7号. 英語語法文法学会. 19-33.

引用作品

[小説]

- Archer, Jeffrey. 1979. *Kane and Abel*. Coronet Books. [*Kane*]
Capote, Truman. 1975. *A Day's Work*. Signet. [*Work*]
Clancy, Tom. 1987. *Patriot Games*. Berkley Books. [*Patriot*]
Clark, Mary Higgins. 1992. *All Around the Town*. Arrow Books. [*Town*]
Cornwell, Patricia. 1990. *Postmortem*. Warner Books. [*Postmortem*]
—. 1991. *Body of Evidence*. Avon Books. [*Body*]
—. 1992. *All That Remains*. Warner Books. [*Remains*]
Freemantle, Brian. 1978. *Clap Hands, Here Comes Charlie*. Arrow Books. [*Clap*]
Grisham, John. 1991. *The Firm*. Island Books. [*Firm*]
—. 2001. *Skipping Christmas*. Dell Book. [*Christmas*]
—. 2009. *The Associate*. Dell Book. [*Associate*]
Guest, Judith. 1976. *Ordinary People*. Ballantine Books. [*People*]
Sheldon, Sidney. 2001. *The Sky Is Falling*. Warner Books. [*Sky*]
Tyler, Anne. 1985. *The Accidental Tourist*. Penguin Books. [*Tourist*]

[映画台本]

- Mona Lisa Smile*. 2004. 株式会社スクリーンプレー. [*Mona Lisa*]
Verdict. 1994. 株式会社フォーインスクリーンプレイ事業部. [*Verdict*]